

「キリスト教と福祉—新型コロナウイルスの救い」

2020年4月19日
神戸国際キリスト教会
牧師 岩村義雄

主題聖句: 出エジプト記 15章26節「まことに私は主、あなたを癒やす者である」。

<序>

日本では、「福祉」をよく知らない人が「福祉」について語ることがあります。福祉と宗教は別物だと考えるからです。『論語知らずの論語読み』という書物を思い出します。¹

福祉の系譜を理解するためには、宗教抜きでは考えられません。歴史は常に民の救済がどのように変遷してきたのかについて、その足跡を残しています。たとえば、西暦の略称について、紀元前はB. C. (Before Christ ビフォー・クライストの略)や、A. D. (Anno Domini アンノ・ドミニ 《主の時代におけるの略》)、近年はC. E. (Christian Era クリスチャン・エラ キリスト者時代の略)を無宗教、無神論という立場に関係なく使用してきました。² 日本人が想起する「宗教」と、海外で用いられている「religion(英語 レリジョン《宗教の意》)」とは異なっています。日本人は平気で「私は無宗教」と言っただけたりします。すると海外ではげんな反応をされるのが一般的です。しかし、無宗教がなぜ受け入れられないかについては、日本人はわかりません。いわゆる宗教オンチなのです。そうは言っても、ほとんどの日本人は正月の元旦に初詣に行きますが、「宗教者」としての自覚はありません。つまり、日本では宗教なるものはいつ、だれによって始められたかについて、わからない、自然発生的な土着化したものならよしとします。「新嘗祭(にいなめさい 《献穀祭のこと》)」、地鎮祭、大嘗祭(だいじょうさい 《天皇即位の儀礼》)などの非常に宗教的な行為も単なる儀式として目くじらを立てません。儀式は日本人の習慣や風俗になじんでしまった精神活動にすぎず、宗教らしくないのでなんの問題もないという判断をされがちです。したがって、政教分離に反するものでないと、明らかに神道式の行事も裁判で認めてしまいます。³ 一方、仏教、キリスト教、イスラーム教などは教祖、教典、そして教団という三つのセットがあります。世界的な普遍宗教、制度宗教は「布教活動」をベースにして発達してきました。

「福祉」とは何かを考える場合、いつしかボタンのかけ違いが宗教界、役所、福祉関係従事者のみならず世間一般に行き渡っていないでしょうか。社会福祉学者の嶋田啓一郎[1909-2003]氏は、「福祉」の由来について言及しておられました。「福祉」という言葉は漢の時代の書『易林』に「福祉とは極みなき齢を全うして喜びに与かること」、とすなわち神事において神さまからもたらされるものの意味として用いられ出したそうです。⁴

¹ 「程子曰。讀論語。有讀了全然無事者」程子(ていし)の曰(いわ)く、論語を讀みて、讀了(どくりょう)して全然事(こと)無き者有り。小説家阿川弘之[1920-2015]が講談社文芸文庫で2010年に発行。

² 『宗教学キーワード』(宮本要太郎 有斐閣 2016年 135頁) 歴史全体が神の意志の発現であり、したがって歴史において起因する出来事はすべて神の啓示であるとみなされる。

³ 『法律のひろば』第30巻第10号(「憲法にいう政教分離の原則」清水睦 1977年 13頁)。

⁴ 『新しいコミュニティの創造』(嶋田敬一郎 全国社会福祉協議会編 1986年)。『聖書と福祉—共生の社会をめざして—』(横山讓共 株式会社エマオ 1998年 51頁)。WEBのU-Universityの語源事典の「福祉」によると、次のようにある。① さいわい、幸福、ふくち。② 宗[教] 消極的には生命の危急からの救い、積極的には生命の繁栄(『広辞苑』の初版(1955年)。中国最古の詩集「詩経」の中の、漢の朝廷学派のひとつ「韓学派」が残した『韓詩外伝 三』に出て来る言葉で、意味は「① さいわい、しあわせ、幸福」(『漢語林』大修館書店)。「福(フク)」は「神に捧げる酒壺、<福のつくり=富(フク)=酒壺>」に由来し、神に酒をささげ、酒だるのように豊かに満ち足りてしあわせになることを祈るさま。「祉(シ)」は「神が止(とど)まるところにいることのしあわ

今朝は、「新型コロナウイルス」の蔓延にあつて、キリスト教と福祉について聖書から考えてみたいと思います。

目次

- (1) 福祉の黎明期
 - a. 病気, 寿命による老化, 戦争での負傷
 - b. ユダヤ社会における「慈善」はボランティアのはたらき
 - c. 日本の慈善事業
- (2) 国家権力と宗教者の分断
 - a. 「宗教とはこわい」というエートスを作り上げる
 - b. 為政者押しつけの「公共宗教」
 - c. 寺社, 宗教団体, 教会の弱体化
- (3) 「田・山・湾の復活」
 - a. 路上生活者, 統合失調症, 引きこもり
 - b. 組織の「和」ではなく、「ひとりを尊ぶべし」
 - c. 弱者を顧みる「公共」宗教

(1) 福祉の黎明期

a. 病気, 寿命による老化, 戦争での負傷

なぜ宗教者が福祉の源流に存在すると言えるのか, 歴史的な系譜を辿ることができます。

古代の民衆にとって苦難の最大のものは病気でした。医学の発達していない時代において, 病気を癒すのは宗教家, むしろ呪術者でした。⁵

『エリアーデ世界宗教事典』によると, 四大文明発祥の地のひとつであるメソポタミアのシュメール人の神殿では, 病気を治したり, 人々が健康と繁栄を得るために自分たちの神々を大切にしていた痕跡があります。⁶ 「病気」に対するはたらきは「慈善」の中心でありました。

古代イスラエルにいたと言われているヨブという人物は, ハンディキャップの方, 貧者, 旅行者に対して積極的に行動をしていたと記されています。「私は見えない人の目であり 歩けない人の足であった。貧しい人の父であり 見知らぬ人の訴えに力を尽くした」(ヨブ 29:15,16)。

宗教の起源を考察すると日常生活が浮き彫りにされてきます。東京大学名誉教授の大貫隆氏は, 歴史的検証をなさっています。「汚れた者としてさげすまれていた徴税人, 罪人, 売春婦, 乞食, 貧乏人, 障がい者に目を向け, 病いを癒し共に食事をして, 包含的な共同体を形成していった」。⁷ 「貧窮者, 病人, 障がい者, 徴税人, 売春婦といった社会の除け者を差別排除することによって得る『聖性』ではなく, 誰をも見失われた者にせず, 神に在って十全に生かされた者とする, 包含的な共同体の全体性の回復こそが, イスラエルを神の聖なる民にする」, と。⁸

せ」。英語「welfare(ウェルフェア)」の語源を遡及すると, 「1303年, 幸福, 福利, 健康。fare(フェア)は, farewell(フェアウェル=さらば・別れ)の名残り」, 「1904年, 子ども, 失業者などの well-being(ウェルビーイング=幸福の状態)に関する社会的関心や支援を意味する言葉として, 初出した」 “Barnhart Dictionary of Etymology” Robert K. Barnhart Hw Wilson Co 1988.

⁵ 『イエス逆説の生涯』(笠原芳光 春秋社 2005年 56頁)。

⁶ 『エリアーデ世界宗教事典』(ミルチ・エリアーデ/ヨアン・P・クリアーノ 奥山倫明訳 せりか書房 1994年 35,36頁); “Mesopotamian Religions” T.Jacobsen ER 9 447-466.

⁷ 『イエス研究史—古代から現代まで—』(大貫隆・佐藤研 日本基督教団出版局 1998年 357頁)。

⁸ (同 359頁)。

ユダヤ教の出発点においては、神から与えられた律法があります。⁹ その中に、פֶּאֶר「ペアー」という「慈しみの業」、すなわち慈善福祉についての律法がありました。ペアーはヘブライ語で「隅(すみ)」を意味します。畑の収穫量に関して、「隅」の産物を貧しい者や寄留者のために残しておかねばなりません¹⁰。主はモーセを通じて、「土地の実りを刈り入れる場合、あなたがたは畑の隅まで刈り尽くしてはならない。刈り入れの落ち穂を拾い集めてはならない」、また「畑の隅まで刈り尽くしてはならない」と諭しています(レビ記 19:9)。理由については、続く文脈に記されています。「貧しい人や寄留者のために残しなさい。私は主、あなたがたの神である」(レビ記 23章22節)、と。¹¹

“ユダヤ教の律法には、未亡人や在留異国人、難民、貧しい者は落ち穂拾いをして生き延びることができる取り決めがありました(申命記 24:19)。人々が弱者を虐げたり、貧しい者から搾取すると、神は預言者を通して警告されています(アモス 2:6-8;エレミヤ 5:26-31)。そして祭壇へのささげものより孤児、やもめの人権を守るようにと繰り返し神は語ります(イザヤ 3:13-15,11:11-17)”。¹²

神は弱者である者を虐げることが神自らの意志に反すると規定されました。「寄留者¹³を虐待してはならない¹⁴。抑圧してはならない¹⁵。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである。いかなる寡婦¹⁶も孤児¹⁷も苦しめてはならない。あなたが彼らをひどく苦しめ、彼らが私にしきりに叫ぶなら、私は必ずその叫びを聞く。私の怒りは燃え上がり、あなたがたを剣で殺す。あなたがたの妻は寡婦となり、子どもは孤児となる」、と戒められて、弱い立場にある女性の権利を保障することが神のユダヤ民族に定めた掟⁸(義務)となりました。これらの女性を虐げることが神の掟に反することであると規定していました(出エジプト 22:20-23)。「近所の女たちは、『ナオミに男の子が生まれた』と言って、その子に名を付け、オベドと呼んだ。彼はダビデの父であるエッサイの父となった」に記されているように、「近所の女たちは」相互扶助のコミュニティに寄与していました(ルツ 4:17)。女性たちが互いに親密になり、また互いに分かり合えるようになることで、行政レベルでいちいち社会的な便宜をはからなくても、共同体の福祉サービスが豊かに与えられていました。「青銅の旋盤とその青銅の脚を、会見の幕屋の入り口で仕える女たちの鏡で仕える」、という言葉からも想像することができます(出エジプト 38:8)。

b. ユダヤ社会における「慈善」はボランティアのはたらき

キリスト教の祖と言われるイエス・キリスト自身は「キリスト者」(クリスティアーノス)ではありません(使徒 11:26; I ペテロ 4:16)。つまりキリスト教派を作ったのではありませんでした。終生、ユダヤ教 Ἰουδαϊσμός ユーダイスモスの信者でした。このイエスはボランティアの完成者でした。

⁹ 『イスラエル古代史—起源からカナン定着まで—』(R・ドゥ・ヴォー 西村俊昭訳 1986年 445頁); 『聖書年代学』(ジャック・フィネガン 三笠宮崇仁訳 1972年 28頁)。

¹⁰ “*The timechart History of Jewish Civilization*” Nasser D.Khalili Ther Eternal City 2006 p.2 紀元前 1300-1200年(ラメセスII世 [在位紀元前 1279-1213/12]から以降)にユダヤ人はエジプトの奴隷状態から脱出し、モーセにシナイ山で律法が与えられた。

¹¹ 『タルムード—ペアー篇—』(三好迪[みち] 株式会社三貴 1997年 2頁)。十分の一税の目的の一つは、慈善事業でした。『タルムード—ケトウボート—』(同 1994年 195頁)には、創世記 28章 22節には、十分の一税について、「その時、柱として私が据えたこの石は神の家となるでしょう。そこで私は、あなたが与えてくださるすべてのものの十分の一をあなたに捧げます」と、

¹² 拙論『マナ』誌(いのちのことば社 2013年 76-77頁)。

¹³ פֶּרֶץ ゲール 《在日異邦人、難民の意》。

¹⁴ יָנָה ヤナー 《抑圧する、虐待する、暴力をふるうの意》。

¹⁵ לָחַץ ラハッツ 《しいたげる、押し付けるの意》。

¹⁶ אֵלְמָנָה アルマナ 《やもめの意》。

¹⁷ יָתוּם ヤトーム 《父親がいない孤児の意》。

¹⁸ 『社会福祉と人権』(木原克信 ミネルヴァ書房 2014年 115頁)。

イエスは重度の障がい、目が不自由である、耳が不自由である方々と「共苦」しました。「すると、男たちが体の麻痺した人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。しかし、大勢人がいて、運び込む方法が見つからなかったの、屋根に上って瓦を剥がし、病人を床ごと群衆の真ん中につり下ろし、イエスの前に置いた」(ルカ 5:18,19)。「男たち」と述べられているボランテアが、この聖句に示されています。ユダヤ社会にもいたことが伝わります。続きの 20 節に、「イエスは彼らの信仰を見て、『人よ、あなたの罪は赦された』と言われた」と記されています。イエスは、ボランテアの「信仰を見て」、不自由なくらし、孤独感、無力感の人が「罪赦された」と宣言されたのです。¹⁹

キリストは他者へのはたらきにおいて当時のユダヤ人たちに大きな影響を与えました。「群衆はこれを知って、イエスの後を追った」の「群衆」(ὄχλος オクロス)とは、「山上の説教」でイエスのメッセージに耳を傾けたオクロスと同じような貧者、弱者、病人たちです。「さまざまな病気や苦しみをかかえる人、悪霊につかれた人、発作になやまされる人、体が麻痺した人など、ぐあいをわるくしているあらゆる人たち」²⁰です(ルカ 9:11)。²¹

やがてイエスの弟子たちのはたらきは地中海沿岸に広がります。ハーバード大学のケスター博士は、「組織立った老人養護の起源はキリスト教の、年老いた寡婦たちの施設に見ることができる。彼女たちは再婚することができず、従って共同体の世話を受けたのである。救貧院・孤児院・病院の設立はキリスト教徒皇帝たちに負っている」と言及しています。²²

新型コロナウイルス肺炎の流行と同じように、当時のローマ帝国を震撼とさせる疫病が襲いました。主要都市の半数以上の人々がなくなりました。キリスト者迫害の手がゆるみ、キリスト教が国教となる契機になったのではないかと推測できます。²³

古典的なポリス共同体を統合していた神話的権威が衰退する原因は、伝染病があげられます。コレラやペスト、現代でもまだ不明の蔓延した死の病がローマ帝国を襲いました。都市そのものが、経済的にも政治機構の上でも、内部からゆきづまりました。崩壊現象です。伝統的な修身道徳、倫理、宗教も機能を果たさなくなりました。そんな西暦 1 世紀、2 世紀にかけて、イエス、またイエスに追従するボランテアは、病気、貧困、差別に苦しむ人々への「福祉」を開始したのです。なぜなら社会の底辺で「呻いて」いる人々は見棄てられていたからです。もしイエスがボランテアの完成者と言うなら、極東の「場」である日本の弱者の「呻き」は聞き届けられているのでしょうか。

¹⁹ 「罪」とは、ギリシア語 ἁμαρτία ハマルティア「人が神より離れてそむいている霊の状態の意」です。イエスはそんな断絶の状態から「解放されたんだ」と宣言しました。その人自身が信仰を告白したから、「赦された」(ἀφίημι アフィエミ「去らせる、行かせるの意」)ではありません。隣人の行為によって、「罪」が「赦された」場面です。

²⁰ 『釜ヶ崎と福音—神は貧しく小さくされた者と共に—』(本田哲郎 岩波書店 2009 年 90 頁)。

²¹ 拙論「キリスト教と災害」(礼拝説教 2020 年 3 月 15 日 9 頁)。キリストが「群衆はこれを知って、イエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療(ギリシア語 ἰάομαι イアオマイ「医者、医師が癒す」の意)の必要な人々を癒された(θεραπεία セラペイア θεραπεύω セラベウオーの名詞形「手当て、奉仕、看病すること」の意)。(ルカ 9:11)。手当てした結果、癒される場合もあったでしょう。しかし、キリストの主な業は「手当て」でした。

²² 『新しい新約聖書概説 上—ヘレニズム時代の歴史・文化・宗教—』(ヘルムート・ケスター 井上大衛訳 1989 年 436 頁)。

²³ 『神学研究』62「キュプリアヌスの疫病」考(土井健司 2015 年 25-39 頁)。キュプリアヌス[西暦 3 世紀初頭-258-258]がカルタゴの司教(主教・監督)であった時代。① 疫病の原因は多数の死者の血で海が腐り、その腐敗によって生じた疫病が風に乗って広がったこと、② 疫病以前の 40 歳から 70 歳までの人口は、疫病がはじまった後の 14 歳から 80 歳までの人口より多かったということ、③ 次々に人が亡くなり若者が死に怯えた結果、生きる気力を失い無感覚になってしまった。

262 年にはローマやギリシアでも疫病の被害はなお甚大であったようである。その後、人びとに免疫力がついたのか、疫病の流行はようやく終息したものと考えられる。およそ 11 年間ローマ帝国各地を断続的に流行し、各都市は何度か同じ疫病に襲われたものと思われる。疫病の正体は不明に止まるが、その症状は下痢と脱水、重篤な咽頭炎、嘔吐、眼の充血、四肢の壊死、歩行不能、聴覚と視覚の喪失を伴うものであった。おそらく死者は最大で半数近いと思われるが、これはディオニュシオスの最初の復活祭書簡から推測できる。当時キリスト者はこうしたなか看病に努め、時に亡くなっていったのであった。

c. 日本の慈善事業

日本の奈良時代、民衆は常に貧窮や飢餓と隣り合わせの生活を強いられただけでなく、追い打ちをかけるように、天災、疫病、凶作、飢饉などにさらされていました²⁴。759 年完成の日本の最初の和歌集『万葉集』に、山上憶良[やまのうえのおくら 660-733]、奈良時代初期の下級貴族の歌人が次のように歌っています。「世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」と。²⁵

光明皇后[こうみょう 701-760]は、723 年以降、施薬院(せやくいん)と悲田院(ひでんいん)の二つを設立し、貧窮している病人、孤児、乞食を施設に収容したり、物を施したりしていました。極東の地にあっても、病人、弱者、貧者を顧みる「風」(ヘブライ語 רוח רוּח ルーアッハ)が人々に及びました。「たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです」(ローマ 2:14)。

しかし、室町幕府 8 代将軍足利義政の継嗣争いにより、応仁の乱[1467-1478]が起こり、日本全国が巻きこまれました。都である京都も焼け野原になりました。治安の悪化とともに宗教勢力も武力を強め、僧兵が権勢を掌握していきます。その結果、法華衆の 3000 人とも 1 万人ともいわれる人々が犠牲になりました。²⁶

フランシスコ・ザヴィエル[1506-1552]の死後、来日したポルトガル人の医師の免許をもった商人ルイス・デ・アルメイダ[1525-1583]は、嬰兒殺しの慣行を見て、1556 年に豊後府内(大分県大分市)で私財を投じて育児院を開設。翌年に日本初の総合病院を始めました。アルメイダは、僧侶などの要求によく応え、医師として貧しい人々を助けました。²⁷

明治維新[1868 年]前の 1859 年、J・C・ヘボン[1815-1911]は 44 歳の時、神奈川に上陸。空き寺を住居に診療をはじめました。身分の貴賤を問わず治療し、困っている人からは一文も謝礼をとりませんでした。尊王攘夷派の襲撃から身を守るため、籠もって日本で最初の和英辞典を編纂した際、ヘボン式ローマ字を考案しました。聖書の翻訳事業にも携わっています。東のヘボンに対して、西のジョン・C・ベリー[1847-1936]は、貧民病院「恵濟院」および「兵庫県病院(神戸病院)」(神戸大学医学部附属病院の前身)を創設しました。ベリーも貧民に医療を無料で施しました。1887 年、彼は日本で最初の看護学校を設立しました。²⁸ 隣人愛に基づく精神を実践する宗教者は孤児救済事業、女子教育、更正保護などを開始、推進、発展させましたが、日本の富国強兵政策による負の遺産を補う働きにはなれなかったのではないかと思います。筆者は神戸バイブル・ハウス再建 10 周年誌に、「諸外国で 20 世紀の三大哲人のひとり」と称される賀川豊彦。老人、自殺者に影響を与えた城ノブ²⁹……ただし、富国強兵政策からの脱却、差別感情、人権の意識を変革することにある程度寄与したものの決定的な力とはならず、戦時下には、時の為政者に迎合してしまいました」と寄稿しました。³⁰

明治維新以降、自分の弱さをさらけ出すことができないエートスが日本列島を覆っていました。

²⁴ 『日本人の博愛精神』(中山理 祥伝社新書 2011 年 154 頁)。

²⁵ 「この世の中をつらい、身もやせ細るようだと思ふけれども、飛び立ってどこかへ行ってしまうことも出来ない」(WEB)現代訳 <https://nbataro.blog.fc2.com/blog-entry-354.html>

²⁶ 『近江六角氏の研究動向』(新谷和之 戎光祥出版 2015 年)。

²⁷ 『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局 1986 年 87 頁)。; 大分市医師会立アルメイダ病院の「沿革」 <http://www.almeida-hospital.com/almeida-history.html>

²⁸ 『神戸と聖書』(近藤春樹共 神戸新聞総合出版センター 2001 年 58-62 頁)。; 『治験録』(神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ 附属図書館医学分館貴重書 1874 年。 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kichosyo/chikenroku/>)

²⁹ 城ノブ[じょう 1872-1959] 明治～昭和期の社会事業家。戦災孤児、戦争未亡人の保護。『福祉新聞』(2013 年 7 月 22 日付)。

³⁰ 拙稿『手を携えて』(KBH10 周年記念誌編集委員会 神戸新聞総合出版センター 2013 年 14 頁)。

(2) 国家権力と宗教者の分断

a. 「宗教とはこわい」というエートスはどのように作り上げられたか

日本社会福祉学会会長を務めた阿部志郎氏[1926 年生] は次のように語っておられます。“1871[明治 4]年に岩倉具視[1825-1883]、伊藤博文[1841-1909]ら 46 名の使節が欧米 12 カ国を 2 年にわたって視察しました。ロンドンのスラムの貧困のすさまじさを見て、「救貧はほどほどにすべし」と救貧について一行の目は開かれませんでした。帰国後、1874 年に「恤救(じゅつきゅう)規則」をつくり、貧困者たちの救済にとりかかります。しかし、富国強兵政策の推進もあり、貧困者同士がお互いに助け合うことや、国ではなく地方が責任をもつように強調されました。³¹1872[明治 5]年、ロシアのアレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公が来日したとき、浮浪者 240 名を強制的に隔離収容してしまいます。東京市小石川区大塚辻町にあった東京市養育院です。国賓に見せられない。浮浪するのは恥、という捉え方です。富国強兵と言いながら、負傷した兵隊は廃兵にしてしまいました。要するに、軍人でも戦闘能力を失うと捨てるというわけです”。³²

井上毅[こわし 1844-1895]は、キリスト教を邪説として排撃する思想を若年期から持っていました。彼は教育勅語を起草、明治憲法を作る上で大きな働きをしました。「君主は臣民の良心を自由に干渉」しないとす法治主義を主張しました。³³

井上は、「『内想』は許すが、『外顕』は禁止する……彼が禁止を必要と考えた内容は、聖書などの出版、説教などの布教活動、葬式をキリスト教式で行うこと……信仰は、個人の心のなかにとどめておく場合にのみ許されるが、布教などの社会的行為は、全面的に禁止する」と文部大臣として強弁しました。つまり「宗教」を「内」(個人の内面)と、「外」(布教活動)に分けて、「内」の部分だけを正統な宗教とみなす道筋を民衆に植え込もうとしました。³⁴ そのことは、日本人が「無宗教」と思い込む大きな真理契機になっています。

文明開化、禁教令撤廃、民主主義に隠された官僚独裁主義は、宗教家の福祉事業を下部組織に取り込んでいきます。「外」面的な活動は「お上(かみ)」が管理するようになり、宗教色がある作業、奉仕、活動について社会は距離をおくようになります。民衆も宗教がこわいと思うように操縦されてしまいました。「公」と「宗教」の分断です。

日本は、官治集権、つまり「有司専制」が明治 6 年以降徹底されてきました。大久保利通[1830-1878]は議会を通さず、政策を立案、実施する官僚中心の政治を始めたのです。一度認められた権限、予算、人員は失いたくないという官僚制の病は治っていないのではありませんか。どんな大規模な災害が発生しても、官僚に自己改革はできませんでした。中央官僚は法体系の整合性に際立った才覚を発揮してきました。たとえば、東日本大震災において、広域的な津波による犠牲のうちでは溺死が 9 割とされています。この点について、逃げ遅れた身体障がい者や、要介護者の犠牲が多かったことが推測できます。生活保護受給者も一般災害者の 2~3 倍の高さで犠牲者を出しています³⁵。阪神大水害(1938[昭和 13]年 7 月 3-5 日)で、その時点で死者 933 人、神戸市

³¹ 『恤救規則の成立 明治絶対主義救貧法の形成過程』福島政夫・編『戸籍制度と「家」制度』(小川政亮・福島政夫編 東京大学出版会 1959 年 264 頁)。恤救規則は戦後 1950[昭和 25]年の生活保護法に引き継がれます。

³² 『キリスト教福祉の現在と未来』阿部志郎共 キリスト新聞社 2015 年 27-28 頁。

³³ 『〈公共宗教〉の光と影』(津城寛文 春秋社 2005 年 143-144 頁)。

³⁴ 『日本人はなぜ無宗教なのか』(阿満利磨[あま としまろ 1939-] ちくま新書 2006 年 78-79 頁)。同書の 83 ページには、「天皇を中心とする、強固な中央集権国家を目指した、日本の近代国家は、キリシタン解禁を契機に、統治上の関心から、宗教を「内」と「外」に分断し、国家によって認められるのは、「内」の部分にかぎるという「常識」をつくりあげることに成功した」と「天皇崇拝」について分析しています。

³⁵ 『医療と地域社会のゆくえ』(角瀬[かくらい]保雄 新日本出版社 2013 年 28 頁) 同書の 29 ページ、「病院は 3,4 階建てが多

の 72%, 69 万 6 千人が罹災されました。「砂防ダム」が決壊したことが大きな原因です。人災でした³⁶。現在の福祉, 弱者救済, 自衛隊依存では, 解決できません。オランダのジャーナリストであるウォルフレン氏(アムステルダム大学名誉教授)は日本と諸外国を比較して日本について語っています。「現状を維持する術に長けている。官僚は環境の根本的な変化を極端に嫌う。自分の属する組織の権限に不利に働きかねないからだ。彼らは, 自分たちの権限が強化されると思われる場合にのみ, 変化を受け入れる」と。³⁷

b. 為政者押しつけの「公共宗教」

「福祉」「慈善事業」「ケア」を国の大きな柱にしようとする「宗教家」たちが仕える「破れ口」は日本列島を覆っていました。なぜなら倒幕運動, 戊辰(ぼしん)戦争[1868-1869], 西南の役[1877]などの闘いで民は疲弊しきっていました。内乱, 戦争, 隔絶には必ず弱者が犠牲になっていたからです。食糧強奪, 民への拷問, 殺害, レイプなどは必須の悪行です。病気の蔓延に対する慈善事業は当時の日本は途上国でした。「福祉」を優先する前に, 日本は欧米に追いつきたいために, 「公共宗教」を確立しようしました。

日本の政教関係の歴史は, 図式的に言えば, 古代における宗教的権威と国王の相即的關係にはじまり, 中世では政治権力と寺社勢力との自覚的な対等関係の維持, 近世における外来宗教であるキリスト教の禁制と寺請制度による仏教・寺院管理・統制の強化へと展開していったと, 明治大学院法学部教授の中野実氏は「お上(かみ)」の宗教管理と統制について指摘されました。³⁸つまり日本が目指す「公共宗教」は「神道(しんとう)」のみにして, 近代国家を作り上げようしました。天皇は大日本帝国憲法[1889]と皇室規範に基づいて全国民を「臣民」として支配下におきました。³⁹その結果, 「穢多・非人」は近世的身分制のヒエラルキーの中で最下位に位置づけられました。国家権力も身分制における貴賤観を一貫して持ち続けています。平等, 身分制撤廃, 基本的人権を口では言いながら, 「部落問題」は社会レベルで根強く生き続けています。天皇を貴い存在とするためには, 賤しい存在が必要だからでしょうか。アイヌ, 琉球, 在日コリアンも最下層として, 人権がないがしろにされたままです。朝鮮学校への差別は過去国連人権委員会で 6 回是正勧告を受けてきました。他にも, ヘイトスピーチ, アイヌの人々の権利, 琉球・沖縄の基地問題も同様に差別だとして懸念表明や是正勧告になされてきました。国連子どもの権利委員会は去年 2 月 7 日, スイスのジュネーブで開かれた記者会見で, 日本政府は朝鮮学校を「他の外国人学校と同等に扱うべきだ」と述べています。⁴⁰

したがって, パンデミックの今こそ, 東京大学名誉教授であられる島菌進氏が唱える「公共的なるもの」そして「共同的なるもの」の価値観の根幹を考え直す時期だと思います。⁴¹

いこともあり, 上階に避難し命が助けられても, ライフラインの途絶のために折からの雪で冷え込み, 高齢の重傷者が次々と「低体温症」で命を失った病院もありました。”

³⁶ 拙論「危機の時代から刷新の時代へ その二 一見捨てられた松末—」(2019 年 3 月 31 日)。拙論「キリスト教とボランティア道—水平の〈運動〉から, 垂直の〈活動〉に—」(宗援連 2016 年 5 月 1 日 東京大学)。

³⁷ 『人間を幸福にしない日本というシステム』(カレル・ヴァン・ウォルフレン 鈴木主税訳 新潮 OH!文庫 2000 年 105-106 頁)。

³⁸ 『宗教と政治』21 世紀の政治学(中野実 新評論 1998 年 137 頁)。

³⁹ 『部落問題・人権事典』(部落解放・人権研究所編 解放出版社 2001 年 1016 頁)。法・政治制度上の自由は一般社会の共同体的差別の存続のなかで解体(解放)をみなかった。

⁴⁰ 『NHK』(2019 年 2 月 8 日)。

⁴¹ 『宗教と公共空間—見直される宗教の役割—』(島菌進共 東京大学出版会 2014 年 242 頁)。同 248-249 頁。「真理に対するアプローチとして『宗教的なるもの』と『科学的なるもの』を考えるならば, そもそも両者が絶対的に対立するものであるとは思えない。むしろ両者は補完的なものであろう。『宗教的なるもの』への異他的(ヘテロドックス)な探究において合理的懐疑は不可欠

日本の教育制度では障がいを持つ子どもの教育権は否定されてきたことがあります。1979年より養護学校教育の義務制が実現し、全員就学の体制ができました。しかし、障がいを持つ児童、学生を一般の教育制度から隔離することは社会から特別のネガティブな価値観を生じることになります。これは対社会的レベルでの否定的価値観の現れです。⁴²

c. 寺社、宗教団体、教会の弱体化

浄土真宗本願寺の水月昭道(みずきしょうどう)住職によりますと、「いまや、寺院消滅時代である」そうです。⁴³ “地域の親族らが「死」を丁寧に看取り、送る時代は、遠く過去のものになりつつあります。独りで死んでいき、その後は死者と生者との「付き合い」はなくなります”と、『寺院消滅—失われる「地方」と「宗教」』の著者鶴飼秀徳[うかい しゅうとく 1974年生]氏は語られています。⁴⁴

ペット葬からも、日本の都市化、核家族化の断面が見えてきます。人間の葬送の形態が縮小していくのとは逆にペット産業の方は肥大化しています。核家族化の終着点は孤独死です。葬儀を直葬にした後、遺骨が電車の網棚などに置き忘れたかのように骨壺を放置されることが増えています。⁴⁵

宗教ばかりが人を救うわけではありません。被災地、限界集落、被差別部落でも、牧師や僧侶のみならず、無宗教の世俗カウンセラーや福祉活動家が大勢含まれます。伝統的な意味での宗教は必須の要件ではなくなっているのです。⁴⁶

「福祉」「慈善」「隣人愛」の本家である「宗教」を否定するエートスが日本を包み込んでいます。なぜ不人気なのか、「宗教」自体が活気を失ったのは「世俗化」しすぎたことが原因でしょうか。日本特有の「無宗教観」により、教勢が増えず、足踏みしていることに影響しているのでしょうか。大阪大学大学院の稲場圭信教授は日本人の「無自覚の宗教性」があることを指摘されています。⁴⁷

さらにドイツのコンスタンツ大学名誉教授であるトマス・ルックマン[1927-2016]氏は、宗教は決して世俗化しているようであっても、力がなくなっていると断定的に釘をさしています。「宗教を(教会のような)組織化された形態のみで捉え、宗教の衰退を短絡的に追認する従来の世俗化論を批判した」のです。⁴⁸

戦前においても「お上(かみ)」から迫害された天理教で教える金子昭教授は、「宗教者の実践に共感し寄り添うだけでなく、ときには不都合な真実をつきつける……その社会的存在としての自己を問い直すラディカルな契機となる。こうした事態は、既存の教えをつきくずし、信仰世界を解体させる圧力になるかもしれないが、逆から見れば教えを再解釈し、信仰世界を再構築させる支援ともなりうる」と提言されています。⁴⁹

教典、教義、釈義を再解釈して、宗教者ならではの実践の在り方を模索してみましょう。

であるし、『科学的なるもの』の探究において<存在=力>への感受性は大いに役立つ。

“宗教的精神というのは、原発が『いのち』を脅かすものであること、また、「誰かの犠牲の上に成り立つ」ものであることを重視しているところ、さらに「個人の幸福が人類の福祉と調和する道」を求め、そのためには一人一人が「足ることを知り、自然の前で謙虚である」よう志すことを訴えているところに表れている。”(同 276 頁)。

⁴² 『社会福祉の神学—障害を持つ人たちの QOL—』(アキエ・H・ニノミヤ 横須賀俊司訳 日本基督教団出版局 1993年 21 頁)。

⁴³ 『お寺さん崩壊』(水月昭道 新潮社 2016年 113-117 頁)。……人口減少→地方寺院消滅→本山へあがるはずだった賦課金が減少→いわゆる増税かも→そうなると檀家は悲鳴→持院消滅のスピードが加速→仏教界全体が衰退してしまう。

⁴⁴ 『無葬社会』(鶴飼秀徳 日経 BP マーケティング 2017年 5 頁)。

⁴⁵ 兵庫、大阪、京都の3府県警は2010年度以降、少なくとも91件の拾得届を受理。うち69件(76%)で所有者が分かっていない。『神戸新聞』(2015年8月29日付)。

⁴⁶ 『西洋人の「無神論」日本人の「無宗教」』(中村圭志 デイスカバー携書 2019年 243 頁)。

⁴⁷ 『利他主義と宗教』(稲場圭信 弘文堂 2011年 123 頁)。

⁴⁸ 『見えない宗教—現代宗教社会学入門』(トマス・ルックマン 赤池憲昭・ヤン・スィングドー訳 ヨルダン社 1976年 25-60 頁)。“「世俗化とは、教会のような組織化された制度的宗教(見える宗教)から制度的宗教の形態をとらない『ラディカルに個人化された宗教性』(見えない宗教)への変化”『同』(147-159 頁)。

⁴⁹ 要旨『日本宗教学会第76回学術大会』(金子昭 2017年 東京大学本郷キャンパス)。

(3)「田・山・湾の復活」

a. 路上生活者, 統合失調症, 引きこもり

「福祉」「慈善」「信仰共同体」では相手にしてもらえない落ちこぼれについて、個人の魂の救いを強調する「宗教」でも、なんら解決できてきませんでした。

教会の福祉の仕事は、教職者とその家族の生活をいかに支援するかということが中心になっています。戦後、福祉国家論が登場するようになりますと、キリスト教会は「福祉は行政の責任だから国に任せる。教会は伝道一本で行く」、という考え方に偏り、21世紀に入ってもなかなか自分の教会、教団しか考えていないようです。⁵⁰

路上生活者の増大、うつ、統合失調症などストレス社会の犠牲者、ひきこもりの増大、格差社会が日々、新聞紙上に載るのも珍しくなくなってきました。核家族により孤独死は被災地だけとは限りません。LGBT(Lesbian(レズビアン 女性同性愛者), Gay(ゲイ 男性同性愛者), Bisexual(バイセクシュアル 両性愛者), Transgender(トランスジェンダー 性別越境者)のセクシュアル・マイノリティについて地域社会、寺社仏閣、教会も及び腰です。もちろん中には、気炎を吐いて実践する異端児的存在もおられます。『「新」キリスト教入門(2)』を発刊された新免貢氏がその方です。本書にはこれまで宗教家が忌避してきた LGBT に対する非寛容さを糾弾しておられます。

彼のように、身体面において新自由主義経済社会の毒牙、世界倫理の欠落、宗教家の無責任に対して、この地球にいかに責任をもって生きていくかを問わねばなりません。

したがって、「福祉」の原義から、キリスト教会信者になるのが「幸福」になるためだと過度に期待するようなまやかしの伝道なら、ますます日本人のここから離れていくことでしょう。たとえば、聖書の記録に登場する信仰者の中で、穏やかな恵まれた人生を歩んだ人がいるでしょうか。むしろ困難、試練、四面楚歌でもがき、迷い苦しみながら歩いている人物ばかりです。人生とは苦しみや迷いが主であって、ときどき喜び、しあわせ、平安の「時」があると言い換えた方がよいのではないのでしょうか。

福祉の母ともいうべき宗教団体は日本でどんな有り様でしょうか。“社会で経済力や地位を持つ人が教会でもいばっている。そして、社会で差別や偏見にさらされている人が、教会でも嫌われ避けられている。世の中は力の社会であるが、教会でも力、能力が重視される。教会の中でも人間的競争がある”，と率直に証ししておられます。⁵¹

現在、神社は11万社、寺院は7万ヶ寺ほどあると言われていています。そのうち神社にも寺院にも、宮司や僧侶が定住していない所が多くあります。寺院の場合には、1万5千ヶ寺が無住の寺です。キリスト教会も本格的な無牧(牧師、神父、聖職者がいない)時代を迎えつつあります。キリスト教系の数は192万1834人です。⁵²

宗教も福祉も人間がしあわせになるために、あるとするなら、キリスト教はもっと日本のみならず世界中に増えていけばいいのではないのでしょうか。宗教学者の島田裕巳[ひろみ 1953-]氏は、「一時は一つの文学ジャンルを形成していたキリスト教文学はほぼ消滅しつつある。無教会派のキリスト教信徒が良心的な知識人として影響力を持つこともなくなった。キリスト教は日本で信者を増やせなかつたばかりか、知的な世界における影響力さえ失いつつあるのだ」と指摘しておられます。⁵³

⁵⁰ 『キリスト教福祉の現在と未来』(阿部志郎共 キリスト新聞社 2015年 36-37頁)。

⁵¹ 『病める社会の病める教会』(勝本正實 いのちのことば社 2010年 62頁)。同書の93頁。世の価値観と変わらない様子が紹介されている。『同』(122頁)。

⁵² 『宗教年鑑』—日本国内の宗教統計調査—(文化庁 2018年版)。

⁵³ 『知られざる「日本のキリスト教」』(松谷信司 ポプラ新書 2016年 18頁)。同書には、教会は、“教派によっては定年制をとっておらず、高齢化とともに志願者数も減っているため、多くの牧師や神父が70代、80代でもまだ現役として、教会での働きを続け

キリスト者の宣教は、伝道ではありません。信者獲得を至上命題とする宣教はもう古いのです。愛の実践です。⁵⁴ハンディキャップでの人たちの不自由に対して、「平安がありますように」、と声をかけるだけ、またはお祈りで済ませるのではありません。「路上生活者(ホームレス)」、「統合失調症、分裂症、うつと言われた方々」や「ひきこもりだった方たち」が被災地で、「田・山・湾の復活」のため農・林・漁ボランティアに取り組み、里山管理、農法、海苔収穫などに仕えています。新型コロナウイルスで逼迫している海外の孤児、戦争や被災により夫をなくした独身女性、高齢の独居者に、マスクなど提供している姿は「こうふく」感に満ちています。“共振(Kyoshin: Sympathized resonance)”“共苦(Kyoku: Share sufferings)”, and “共生(Kyosei: Life together)しているからです。

b. 組織の「和」ではなく、「ひとりを尊ぶべし」

東北ボランティアを継続するために、全盲の石川満澄[1948-2010]兄は、よくおっしゃいました。「自分は宮城県石巻市渡波に行けていませんが、いつも一緒に被災地を踏んでいます」と。たとえ目が見えなくても、だれよりも東日本大震災について精通しておられました。かつての盲人口レンゾ了齋(りょうさい)[1526-1592]⁵⁵、盲人ダミアン[1560年頃-1605]を思わせられました。

フランシスコ・ザヴィエル[1506-1552]他による日本上陸後のキリシタン布教について、日本を代表する宗教思想家のひとりである釈徹宗[しゃく てっしゅう 1961 生]住職は語られています。「戦国から安土桃山にかけては伝統的な価値体系が音を立てて崩れていった時代だったから、武士や元仏僧などという知識階級が中心になった」と分析されます。⁵⁶しかし、キリシタンが増えた理由は、武士の藩主層からの入信者もいたことは確かですが、やはり社会の底辺層からの入信者が最も多かったのです。⁵⁷

昨年の一連の台風被害、火山噴火、地震と津波の日本列島、砂漠以上に過酷な風土にどう責任をもつのか、といつも祈り、自問し、行動する「(制度によって)小さくされた人」が震災を通じて誕生されました。

「路上生活者(ホームレス)」、「統合失調症、分裂症、うつと言われた方々」や「ひきこもりだった方たち」が被災地に何度も足を運ばれています。いまや神戸国際支縁機構のいろいろなはたらきの責任者になっておられることは差別を助長する世にあつて、「解放」の旗手です。世からの推薦状、表彰状、資格などいっさいありません。病人、貧者、ハンディキャップの人々のケアのために目に見えない推薦状をお持ちのボランティアです。

福祉、慈善、手当てなどの「ケア」とはなんですか。パリ第8大学哲学教授であるファビエンヌ・ブルジュール氏は、語っています。少し長くなりますが、現場の「ケア」である医療、看護、介護、福祉、清拭(せいしき)、下の世話などが硬直化した制度になっていることを言及されています。

“「ケア」を実践する人びとのすべてが、相互援助、連帯、配慮のための絆を形成することが重要だ。だが、この人びとは、声をあげることができず、公共政策の決定に参加せず、報酬は低いか、私的領域で無償の献身をしている。「ケア」についてのイデオロギーのコンテクストを検討すれば、

ているのが現状です」と教会のリアルを指摘。

⁵⁴ 『Ministry』Vol.44 (松谷信司 キリスト新聞社 2020年3月36頁)。

拙論「キリスト教と災害—第106次東北ボランティア報告—」(礼拝説教 2020年3月15日 神戸国際キリスト教会)。

⁵⁵ 『キリシタン黒田官兵衛上巻』(雑賀信行 雑賀編集工房 2013年 130-131頁)

⁵⁶ 『不干齋(ふかんさい)ハビアン—神も仏も捨てた宗教者』(釈徹宗[1961-] 新潮選書 2011年 20-21頁)。

⁵⁷ 『宣教師ザヴィエルと被差別民』(沖浦和光 筑摩選書 2016年 187,188頁)。

「ケア」の実践は、その倫理的特性が考慮されず、経済的収益性、管理経営の基準に従属させられていることがわかる。「ケア」のネオリベリズムによる管理においては、「ケア」が身体の問題、親密性の領域の問題であることが無視されてしまう。それは、なぜなのだろうか？

自分の弱さを曝す依存状態の人の身体に、世話する人が配慮をとおして接するとき、自律性を至上命令とする主体とは異なる主体が現われる。それは、依存する主体であり、他者を必要とする主体である。

依存は、デリケートで曖昧な関係(暴力的となるかもしれない)のなかにある。そこで、人、アソシエーション、制度の支援が重要になる。ジョアン・トロントが指摘するように、配感における権威は、配慮する人の側にはない。それは、配慮の実践を決定する人の側にある。「医師が、患者を『責任をもって引き受ける』のだ。たとえ、看護師が、患者について配慮し、医師が気づかぬことを指摘してやったとしても。」「責任をもって引き受ける」のは患者を治療する医師だが、「ケア」は患者の身体のさまざまな問題への心配にかかわる。それは、たとえば、看護助手が患者の身体を清拭する場合である。しかし、そのような「ケア」は、地球に拡大する市場においては、ほとんど評価されない。身体の清拭は、依存状態にある人びと(小児、高齢者、病者)への重要な世話の要素であるが、このような世話は、家族であれ職業人であれ、女性に、また移民の出身者や労働者階層の出身者に任されてきた。

「ケア」は、ジェンダー、人種、階層による社会的分割に関連している。それゆえ、「ケア」は、市場社会にとって不可欠であるとしても、低い報酬の労働(支配される人びとが支配する人びとに奉仕する労働)となる。配慮は、日常の生活にかかわっているが、その価値は承認されない。配慮は、人びとの弱さへの対応であるが、しばしば、弱さの連鎖がつくられ、「ケア」を実践する人びとを搾取する連鎖がつくられる。トロントによれば、「ケア」は、制度において存続が危うくなり、周辺化され、脆弱化され、市場の条件、経済的収益性の条件に適合させられる。”、と。⁵⁸

つまり日本などの福祉現場はすでに社会の支配者—被支配者の構造ができあがっており、担当する工程が専門化されています。機械的にクライアントに接するのです。辛い、汚い、単純な労働は低賃金を得るための経済システムで運営されています。人と人の温かい交流、血の通った対話、鼓舞する笑顔すら途絶えてしまっています。現場の仕事は、東南アジアからの研修生たちに委ねられ、管理職はゴルフを興じています。

人類歴史の祖がはるかに見つめていた領域、神に対して開かれた世界を「公共」とする価値観が「復興」しなければと痛感します。「キュアからケア」、「ソーシャル・キャピタル」や「〇〇ネットワーク」も無価値とは言いません。しかし、いつしか政治家、官僚、財界などが「公共性」を宣伝するための便利な下部組織となってしまうました。世の風潮、空気、流行の冒された価値観から、本来の世界観に立ち戻る時期ではないでしょうか。すなわち「宗教」に基づいた「公共」です。宗教は人

⁵⁸ 『ケアの倫理—ネオリベリズムへの反論』(ファビエンヌ・ブルジュール 原山哲・山下りえ子訳 白水社 2017年 80-81頁)。同書の 20-21 ページには、“反知性的ともいえる「ケア」の倫理は、1980年代のレーガン大統領のときのアメリカにおいて生まれた。新たな金融資本主義のメカニズムを優先して、フィラデルフィア宣言、ブレトン・ウッズ協定、国際連合の設立を継承する福祉国家は頓挫した。このとき、ささやかではあるが、「ケア」の倫理は、配慮の仕事の心理的負担、その不可視性、配慮の仕事が道徳の発達において低く位置づけられていることを考察するなかで、論じられてきた。より一般的に言えば、「ケア」の倫理は、人間の絆は市場の交換には還元できないと主張する思想の流れにある。市場に還元できない、この人間の価値の復権は、「社会問題」を問うことによって、その心理的、道徳的基盤を問う。” Alain Supio, “*L'esprit de Philadelphia*”, Paris, Le Seuil, 2010.

間にとって最も根源的な世界を形成してきました。にもかかわらず、宗教は公共の「場」から排除されてきました。⁵⁹ 最も根源的なものが黙殺される日本は、新型コロナウイルスを契機に「ひとり」をたいせつにする「福祉」「慈善」「ボランティア」に立ち返らなければなりません。

c. 弱者を顧みる「公共」宗教

宮城県石巻市を訪れた2011年3月21日、24人が津波により犠牲になった地点がありました。海から約1キロ、伊原津地区にある精神科の病院で、1階の天井まで津波が流れ込みました。

通りかかった時、背筋が冷たくなりました。1階で怖くて興奮して大声を出している患者の口、すごい形相の目、上の方に向かって手を挙げてまがいています。10日経っていますから、こわれた窓の中にいるのは、もういるはずがない死者でした。実際には4月1日まで入院患者はおられました。「恵愛病院」ということですが、生き残った近所の方たちも、沈黙されて何も語られませんでした。「二晩、二階になんとか逃げた人たちも取り残されて、こわい思いをしていたことだべ」と訥々と細い声で言われるのですが、東北弁のせいもあり、なかなか聞きとれませんでした。重い統合失調症、認知症の方たちばかり120人の病院です。統合失調症の後見人ボランティアを神戸市長田区で10年近くしているのに、他人事とは思えません。近くに頼れる人がいないと、過度の緊張状態、手がふるえ、顔は紅潮するので、はじめての人たちは驚かれます。ちょっとした孤独感で、心臓が破裂してしまうのではないかという反応があります。そうすると、医師であっても、鎮静剤の注射で黙らせるしかありません。恵愛病院で生き残った木村勤院長(当時66歳)は、「薬品庫や食糧の備蓄は1階にあったため、ほぼ全滅していた」と2週間後に語られました。生き残った患者が齋藤病院に転院したのは4月1日でした。私たちが最初に神戸から医療物資をお届けし訪問した病院です。

津波から3日目、「いま、いちばん必要なのは灯りなんです。トイレに行くにも真っ暗。患者たちは、譫妄(せんもう)と呼ばれる意識障害になって、症状が悪くなるんです」と藤中好子看護部長は語られていました。⁶⁰

水死体が傍にあったとしても、他の人がもし近くにいれば、救援が来るまで「闇」の中で一緒に励ます合うことができたでしょう。そばにいる、「共生」Life together, 「共苦」Share sufferings, 「苦縁」Relationship to share sufferings が求められます。よだれを垂らして、口臭がひどい、悪態をつくような人々であっても寄り添うころささえあればだれにでもできるのです。

専門家、下働きの奴隷、便利なツールが求められているわけではありません。「被災者」、「病人」、「貧者」が「魂」(soul ソウル)です。旧約聖書学者であるピーダーセン氏は、「身体は外面的なかたちをとった靈魂である」と言います。⁶¹

筆者が見た「幽霊」はなんでしょうか。「靈魂には質量がないから、腐敗することがない。靈魂には成分がないから、分解することがない。それは自存的だから、独自の統一性を失うことがない。またそればかりか、自己の内部にエネルギーのすべての源を含んでいるから、内部的なエネルギーをなくすこともありえない。人間の靈魂は死滅することがない。一度存在すれば消滅することがない。それはとこしえまでも必然的に存在し、無限に存続する」とカトリック哲学者ジャック・マリタ

⁵⁹ 『公共の哲学の構築をめざして』(稲垣久和 教文館 2001年 269-270頁)。

⁶⁰ 『ふたたび、ここから—東日本大震災・石巻の人たちの50日間』(池上正樹 ポプラ社 2011年 199-209頁)。

⁶¹ 『宗教の哲学—ジョン・ヒッカー』(ジョン・ヒック 間瀬啓充・稲垣久和訳 勁草書房 1997年 263頁)。“Israel”, London; Oxford University Press, 1926. I, 170.

ンは述べています。⁶² 彼の推論から考えると、最、人類は人類の黎明期にだれしもがもっていた世界観に敏感に、研ぎ澄まされた感性がもとめられるでしょう。

阪南大学の村田充八名誉教授は、「宗教は、神や仏のような超越的存在によって支えられる場を提供する。そのような存在との関係においては、信者はお互いに完全に平等な関係であり、相互に支え合う関係となる。その意味では、わたしたち人間にとって、宗教とともに生きる生き方は大切なものとなる」と神戸国際支縁機構の若者たちに伝えながら、ともにおられます。⁶³

阿部志郎が言うように、「福祉の哲学は、机上の理屈や観念ではなく、ニードに直面する人の苦しみを共有し、悩みを分かちあいながら、その人々のもつ『呻き』への応答として深い思索を生み出す努力であるところに、特徴があるのではなかろうか」と自問しながら、現場で実践していきましょう。⁶⁴

< 結論 >

大切なことは、新自由主義経済社会の毒牙、世界倫理の欠落、宗教家の無責任に対して、身体的に、この地球にいかに関心をもって生きていくかではないでしょうか。キリスト教系の信者数は、日本全体の1パーセントに過ぎないにもかかわらず、約150年近く、キリスト教の存在意義が認められてきたのは、福祉、慈善、手当てを必要とする貧者に仕えてきた遺産によるものです。「宗教者が慈善事業の母」である歴史的な痕跡を過去のものにしてしまてはいけません。

キリスト者の高学歴、最高裁判所の判事、大学教授、医師など社会的エスタブリッシュメント(既得権益層)が多くいるから信用が得られると錯覚してはなりません。勘違いをしてはいけませんし、また会衆の仲間に社会的地位、評価、収入が多いメンバーがいることで誇ってはならないでしょう。

神が窒息状態、疲弊しきった地球、自国・自我優先の末期現象の地球を新しく「復興」させるのに用いる器は聖書で一貫している「無に等しい者たち」です。

「きょうだいたち、あなたがたが召されたときのことを考えてみなさい。世の知恵ある者は多くはなく、有力な者や家柄のよい者も多くはいませんでした。ところが、神は知恵ある者を恥じ入らせるために、世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、世の弱い者を選びました。また、神は世の取るに足りない者や軽んじられている者を選びました。すなわち、力ある者を無力な者にするため、無に等しい者を選びましたのです」(I コリント 1:26-28)。

日本の法律の中には、「復興」の明記がありません。定義がないのです。古い革袋に新しいいのちの水を注ぐ鍵をもっているのは、抑圧、差別、偏見をもたれてきた「路上生活者(ホームレス)」、「統合失調症、分裂症、うつと言われた方々」や「ひきこもりだった方たち」です。彼らの生きざまに示されているでしょう。「まことに私は主、あなたを癒やす者である」と証しについて口ではなく、行動で実践しています。

説教原稿をその週に、神戸国際支縁機構の村田充八理事に校正していただきました。また不明瞭な箇所について訂正していただきました事務局の翻訳家徳留由美氏、佐々木美和氏、土手ゆき子氏にも感謝します。

⁶² 『同』(261頁)。

⁶³ 『キリスト教と社会学の間』(村田充八 晃洋書房 2017年 243頁)。

⁶⁴ 『福祉の哲学』(阿部志郎 誠信書房 2008年 9頁)。

「キリスト教と福祉—新型コロナウイルスの救い」を拝読しました。大変立派な内容で、説得力があります。拙著も引用していただき、ありがとうございます。

既成のキリスト教会は、日本社会の入れ子状態の中で、その存在を保っています。それでも、指摘されているように、キリスト教が社会福祉に貢献してきたことも事実です。今後も、そうだと思います。

「路上生活者」「LGBT」「統合失調者」「被災者」などといった用語で言い表されている人間存在へのまなざしは、維持可能な社会の基盤となります。しかし、これらの用語は常に、これらの人たちを他者化する機能も果たしており、それにより、矛盾した現行の社会システムを保持する側面を抱えています。入門(1)で言及したエリック・ホッファーが述べているように、地べたを這いずり回っている人たちを生かせば、いろいろなことができそうです。彼ら・彼女らがその気になれば、「合衆国を作ることさえできる」と学歴を持たない市井の哲学者ホッファーは述べています。製図が書ける人がいるかもしれません。大工の心得を持った人もいるかもしれません。料理人の腕を持って言える人がいるかもしれません。町の設計ができる人がいるかもしれません。子供の世話ができる人がいるかもしれません。物を運んでくれる人がいるのかもしれませんが。農作業ができる人がいるかもしれません。漁師の資質を持っている人がいるかもしれません。こういう人たちがたくさん地べたにいます。

しかし、今の社会では、国会議員、政治家、知事、自治体の長が高学歴者で占められつつあります。「専門家」が横行しています。「専門家」は権力者の決定にお墨付きを与える役割を果たしています。仙台市教育委員会が選任した常任のいじめ調査部会メンバーは、その種の専門家たち(弁護士、医師、大学教員)です。私は、その種の専門家たちに対して、調査部会の場で、論陣を張っています。本当に劣悪で、あくどいですよ。いじめに加担している親、教師たちと組んでいますから。

世の中にはたくさんの専門家たちがいて、こういう世の中を作っています。街並みを見ても、どこへ行っても代り映えのしない建物はまさに、「一級建築士」のなせる業です。長持ちする「でこぼこ」状態の建物という発想がないのです。

また、社会が「専門性」の名の下に細分化され、人と人が分断されています。キリスト教はその分断を補強している側面があります。つまり、人を見下しているのです。

松谷氏や島田氏の指摘は当たっていますが、キリスト教は明治以降、上流階級や富裕層を相手に活動し、国家に追従してきました。日本の近代化を応援してきたのです。「伝道報国」です。無教会派も決してその例外ではありません。一時期、郵便などの通信業務に携わった庶民が一生懸命文書伝道に励んだこともありましたが、日本のキリスト教は、有力者に色目を使ってきました、そうするほうが楽であるし、自己保全につながるからです。その結果、キリスト教ホーム形成が助長され、仲間主義が横行し、おいしいポジションについています。ミッションスクールはまさに、その典型です。どこの馬の骨かわからぬ存在は、初めから相手にされていないのです。松谷氏や島田氏の指摘は、そういうことを正面から論じていないのではないかと感じます。そういうことを論じれば、出版界からもキリスト教界からも相手にされなくなるリスクがあるからです。上から目線で観察しているからです。

キプリアヌスやディオニュシウスが引用されていましたが、キリスト教を礼賛している古代の指導者たちなので、その文脈に注意を払う必要があります。彼らは、疫病に直面した際、「いかにキリスト教徒たちは、自分勝手な異教徒と比べて素晴らしいか」という観点で、異教徒批判を展開しています。エウセビオスが『教会史』の中でも、疫病に関するキプリアヌスやディオニュシウスの記述を紹介しています。そこにうまく乗ったのが、土井健司氏の論考だと私は思います。困窮者に対する配慮がキリスト教を活気づけ、ローマ帝国内における位置を確固たるものにしたというめでたい論理は、アメリカの社会学者ロドニー・スタークが“The Rise of Christianity: How the Obscure, marginal Jesus Movement became the dominant religious force in a few centuries”においてすでに展開しています。日本語訳があるそうですが、私は日本語訳ではなく原著を読みました。付け加えますが、ロドニー・スタークは社会学者なので、社会現象を類型化して論じています。たとえば、アメリカにおける統一教会(Moonies)の広がりや要因を、肉体的な伝統的、既成の家族の形態を脱した新しい霊的家族という教義に帰しています。違法な献金集めを行っている統一教会の問題性には言及しません。それは、社会学者の仕事ではないからです。

ヘルムート・ケスターのいくつかの著書は私の研究の道具でもあります。引用箇所を原著で確認しました。トラヌス皇帝が何もしなかったわけではありませんが—孤児に学資をあてがっていてもいた—、一部篤志家に頼らざるを得ず、国家規模の福祉の仕組みができていない中で、キリスト教の果たした役割は小さくはありません。キリスト教徒皇帝たちは、福祉を支配力強化のために利用したかもしれません。一石二鳥です。やらないよりは、やったほうがましですが。「慈善」という価値観そのものは、やはりユダヤ教の遺産であったとも思います。もっと広く言えば、古代オリエント世界の価値観とでも言うべきでしょうか。

とにかく、岩村先生の手稿はもっと他にも知られたほうがいいような立派な内容だと思います。ありがとうございました。